

イベント招致戦略に関する事例報告

高嶋紗莉¹⁾

Case on Event Hosting Strategy

Sari Takashima¹⁾

Abstract

This study presents a case study of event hosting strategies in Japan. The purpose of this study is to clarify the characteristics of event hosting strategies for regional events based on the three-process framework proposed by Chappelet and Lee (2016): Technical Files, Lobbying, and Promotion. Previous studies have primarily focused on mega-sport events and international sporting events, while empirical research on small-scale regional events remains limited. Furthermore, conceptual and systematic understanding of event hosting strategies in Japan has not been sufficiently developed. Therefore, this study examines the applicability of the framework to regional events and compares hosting strategies across different event types, with particular attention to sport events.

A case study was conducted on regional events held in Himeji City, Japan. Data were collected through semi-structured interviews with stakeholders involved in event hosting and analyzed using deductive coding based on the framework of Chappelet and Lee (2016).

The findings reveal that the three processes are applicable to regional events in Japan. In the Technical Files process, local resources such as accessibility and tourism assets were emphasized to enhance the attractiveness of the host city. In the Lobbying process, continuous relationship-building and direct communication with event organizers and local stakeholders played a central role. Furthermore, all three processes were observed in sport events. In particular, Promotion focused less on appealing directly to event organizers and more on strengthening relationships with local communities through infrastructure preparation and community engagement. This reflects the importance of reducing concerns about traffic congestion, noise, and other negative impacts while gaining residents' support for small-scale regional sport events.

キーワード: イベント, イベント招致戦略, 地域活性化, 事例研究

Key words: event, event hosting strategy, regional revitalization, case study

1. はじめに

現在、日本は、少子高齢化や人口集中等の社会問題を抱えている。そのため、政府による「まち・ひと・しごと創生法」(内閣官房, 2014) や文部科学省および経済産業省が中心となり推進された「スタジアム・アリーナ改革指針」(スポーツ庁, 2024) 等によって、各地域は自立的で持続可能な地域活性化を求められている。その地域活性化に関連した取り組みの一つとして、「通常活動の外部で単発的または不定期に実施されるもの」(Getz and Page, 1991)

と定義される、イベントの活用が挙げられる。ホール(1996)では、「イベント(event)」に関して、各地域に経済的・社会的・政治的効果等をもたらすことが示されている。その結果、民間企業や地方公共団体を含む地域住民のレジャーや余暇活動の活性化に取り組む主体は、イベント・ツーリズムにも注力するようになった。またイベント成功においては、目標や目的に伴う行動方針に関する資源配分を考えるイベント招致戦略(Event hosting strategy)が重要となる。とりわけ、スポーツイベント招致戦略に関しては、「招致・開催の成功に向けた開催候補地による一連

1) 神戸大学大学院経営学研究科
〒657-8501 兵庫県神戸市灘区六甲台町2-1

1) Graduate School of Business Administration,
Kobe University
2-1 Rokkodai-cho, Nada-ku, Kobe, Hyogo 657-8501, Japan
268b008b@gsuite.kobe-u.ac.jp

の活動や決定に際し、様々な制度のもと、管理者やマーケティングツールおよび公的資金や他の資源の活用によって、政府、地域社会、イベント主催者等の利害関係者の行動を調整・促進する戦略」(Chappelet and Lee, 2016)と定義されている。さらに、イベント招致を目指す都市は、招致段階から開催後に至る全過程に対して綿密で戦略的な計画を立て、後に直面し得る壊滅的な財政赤字の防止に繋げることも求められる。

他方、イベント招致戦略に関する先行研究は、国内外問わず複数見受けられる。国外では、Chappelet and Lee (2016) によって、スポーツイベント招致戦略の定義とともに、スポーツイベントの招致方法として、理論的な概念である「テクニカルファイル」「ロビイング」「プロモーション」の3つのプロセスが示されている。第一に、「テクニカルファイル」とは、イベント主催者に提示する開催期間や滞在先、会場等を示した詳細計画である。第二に、「ロビイング」とは、イベント主催者との関係構築に向けた賄賂や汚職を伴わない説得行為により主催者とコミュニケーションや関係構築を図ることである。第三に、「プロモーション」とは、世論に対して広報活動を駆使して招致に好印象を与え、支持を獲得した後、地域的利益を主催者に提示することである。当該知見は、イベント招致戦略を主とした研究だけでなく、スポーツイベントへの参加動機や経験に関する研究である Tumati et al. (2025) をはじめ、多岐にわたる研究において活用されている。ただし、Chappelet and Lee (2016) を含む多くの先行研究では、国際大会等の大規模イベントを研究対象としており、実証的な検証は十分に蓄積されていない。また Chappelet and Lee (2016) 以前の研究では、イベント招致戦略の理論構築だけでなく、ロビイングの有効性についても提示されていなかった。具体的に、ホール (1996) では、大型イベントの典型的な企画プロセスが提示されているものの、経済成長と投資や観光客の誘因に貢献することを前提とした合理的で抽象的なプロセスの列举にすぎず、具体的に詳細な過程は提示されていない。すなわち、理論的なフレームワークは確認できないといえる。また、招致活動の前段階である企画に関しては、行政面や経済面に比重が置かれている。とりわけ、イベント施設である会場に関する企画と設営については、イベント効果を最大限に獲得するための考慮事項として、観光客視点からの環境整備である会場計画が提示され、交通や会場問題等への検討を求めている。したがって、Chappelet and Lee (2016) の基盤となる知見は見受けられたものの、理論構築には至っていないといえる。具体的な基盤としては、テクニカルファイルの礎となる報告書や計画書の作成、プロモーションの礎となる会場周辺の環境への考慮にあたる基盤整備である。ただし、

ロビイングの有効性に関しては提示されていない。すなわち、Chappelet and Lee (2016) は、イベント招致活動における理論的なフレームワークを提示した、革新的な研究であるといえる。その結果、近年では、当該知見を基盤とした小規模イベント研究も見受けられるようになった。とりわけ、Strittmatter et al. (2023) では、研究対象をスポーツイベント全般と設定し、スポーツイベント政策をスポーツイベント開催における公共政策およびスポーツ組織戦略として位置付けている。さらにイベント招致の成功における必要条件として、当該知見に加え、政府、自治体、スポーツ組織との連携に関しても提示している。ただし、Chappelet and Lee (2016) と同様に、理論的考察を行うに留まり、実証的なデータは限定的である。

また、国内においては、久保田・和久 (2025) によって、国際競技大会の招致・開催に関する特徴や傾向について網羅的な分析・把握が実施されている。とりわけ、学術と実践の両側面からの研究の必要性に関しては、Chappelet and Lee (2016) の知見に基づき、国内における一連の招致活動に関する概念化や実践例の不足を指摘している。ただし、3つのプロセスによる実証的な把握は不十分であった。また松瀬 (2020) では、東京五輪に関する2016年と2020年の招致活動の比較・考察が実施されている。その結果、2020年の勝因は、ロビイングにあたるIOC委員との関係構築への注力と把握できる。また、全プロセスを網羅的に採用しているが、行政面に比重を置いた政策的視点からの招致活動が多く見受けられた。

以上より、先行研究では、イベント招致活動の傾向について実証的なデータ分析および検証がなされ、理論的なフレームワークについても整備段階であると評価できる。しかし、国内では、スポーツ政策の視点において重要視されている、国際競技力の向上や国際交流、地域活性化等の多様な効果をもたらす国際競技大会の招致に限定的であるといえる。実際、スポーツ庁による「スポーツ国際展開基盤形成事業」(スポーツ庁, 2022) や「国際競技大会の招致・開催による効果の最大化に関する報告書」(スポーツ庁, 2023) 等においても見受けられるように、国際競技大会の招致・開催に対する政策的関心は一定程度確認できる。また、国外と比較し、国内では、招致活動に対する概念的把握は不足しているため、基本的な問題について体系的な理解が十分ではない。そこで本研究では、イベント招致活動における概念化や戦略の重要性を示す Chappelet and Lee (2016) に基づいて、スポーツイベント招致戦略の実態およびその特徴を把握すべく、実態調査を進め、とりわけイベント招致戦略に関する3つのプロセスをフレームワークとして事例研究を行う。研究課題としては、国内イベント全般に対する招致戦略について Chappelet and Lee (2016)

によるフレームワークの適用可能性を示した後【検討課題Ⅰ】、スポーツイベントに焦点を当て、イベント種類別の招致方法の比較および検討を行う【検討課題Ⅱ】。また、Getz and Page（2016）では、イベントに関して、経済的・社会的価値および観光客からの需要を含む形式や規模等に基づき、「メガ」「ホールマーク」「リージョナル」「ローカル」に分類されている。これらのうち、先行研究（Chappelet and Lee,2016；松瀬,2020；久保田・和久,2025）では、メガ・イベントへの着目傾向があった。しかし、本研究の対象は、開催都市が自立的で持続可能な地域活性化を実現可能なイベントに設定する必要がある。したがって、本研究では、イベントによる正と負の影響を調整可能であり、安定的な効果を期待できる、大規模イベントと比較して開催候補地の情勢が招致活動において反映されやすい小規模イベントに該当する、リージョナル・イベントとローカル・イベント全般（以下「地域イベント」と略す）を対象とする。また、本研究では、地域イベント招致活動の実態を明らかにし、イベント規模および種類に応じた招致方法の特徴を把握することに焦点を当てることにより、さらなるレジャー・余暇活動におけるイベント実務および学術への貢献を目指す。

2. 方法

本研究対象は、田村（2006）に基づき、イベント招致活動による地域活性化を目指す都市の代表事例に該当する姫路市における「地域イベント」とする。具体的に姫路市

は、兵庫県において神戸市に次ぐ主要都市であるものの、日本の主要な社会問題を抱えており、「ひめじ創生戦略」のもと、解決に向けて、人口ビジョンや総合プラン、アクションプランを立てて地域活性化を目指している。また、姫路城や書写山等の文化遺産を観光資源として保有するだけでなく、近年では、アクリエひめじの開業や手柄山公園の再開発により、イベントを活用した地域活性化にも取り組んでいる。したがって、姫路市は、一定の経済力を有するものの、課題も抱えている都市であるといえる。また、保有資源だけでなく、外部資源であるイベントを招致して地域活性化に取り組んでいる点から、代表事例に相応しいといえる。また、本研究の方針では、Chappelet and Lee（2016）により提示された3つのプロセスに関する事例研究を行うことから、理論開発だけでなく、理論検証においても活用可能な代表事例を理論事例として選択した。加えて、研究者は限られた資源の中で研究に取り組むことが求められる。ゆえに、筆者の出身地でもある姫路市を研究対象とすることで、分析過程における解釈の齟齬が生じにくく、分析コストの削減が可能と考えられる。以上を踏まえ、姫路市を本研究の研究対象都市として設定した。

具体的な調査期間と調査対象は、表1に示す通りであり、全て対面にて半構造化インタビュー調査を実施した。姫路市役所に提出した研究企画書では、研究概要と調査目的を示し、各イベントに応じた開催候補地関係者の紹介を受けた。その後配布した事前ヒアリングシートでは、①イベントの基本情報、②テクニカルファイル、③ロビイング、④プロモーションの4項目を柱として作成した。ま

表1 インタビュー調査期間および調査対象

調査対象者	日時	調査対象イベント
姫路市スポーツ振興室 A氏	2025年8月29日 15:00-15:30	プロ野球フレッシュオールスターゲーム2024
姫路市観光コンベンション室 B氏	2025年9月1日 13:00-13:25	特別版 お城EXPO in 姫路 姫路城世界遺産登録30周年記念 城うた祭
姫路観光コンベンションビューロー C氏	2025年9月4日 10:00-11:20	安全工学グローバルサミットおよび研究発表会 第68回宇宙科学技術連合講演会
アクリエひめじ D氏	2025年10月6日 14:00-14:55	佐野45周年アニバーサリー・ツアー 山下達郎 PERFORMANCE 2024 IMPERIAL LIVE TOUR 2025

た、回収したヒアリングシートに対して、Getz and Page (2016) に基づき、参加人数やイベント目的等から研究対象として相応しいか再度確認を行った。

次に実施した半構造化インタビュー調査では、事前ヒアリングシートの記入内容に基づき、各プロセスにおける具体的な取り組みについて聞き取り調査を行った。調査は合計3時間10分におよび、録音された全ての音声テキスト化され、口述データとして分析に用いられた。以下、各プロセスにおける質問例である。第一に、テクニカルファイルでは、「開催候補地の具体的なアピール方法とは何か」を尋ねることで、訴求時の工夫等に関する詳細の把握に繋がった。第二に、ロビイングでは、「ロビイングにおける具体的な関係構築方法とは何か」を尋ね、実態だけでなくそのノウハウについても詳細に聞き取りを行った。第三に、プロモーションについては、Chappelet and Lee (2016) の基盤研究である、ホール (1996) の知見も踏まえると、当該プロセスは会場周辺における環境への考慮である基盤整備および世論を活用したイベント主催者への訴求の2段階から構成されると捉えられるため、2種類の質問を行った。具体的には、「市民にイベントを受け入れさせる工夫とは何か」を尋ね、理解を得られないことが多かったため、その際にはSNSの活用や広報活動等例示をした。また、「周辺地域への負の影響への具体的な配慮とは何か」を尋ね、イベント招致活動と周辺地域との関係性について聞き取りを行った。

分析方法としては、【検討課題Ⅰ】では、演繹的コーディングを用いて、スポーツマネジメントを専門とし質的研究について豊富な研究実績のある研究者（大学教員）とともに実施された。まず、Chappelet and Lee (2016) のフレームワークを基盤として、各プロセスである、テクニカルファイル、ロビイング、プロモーションをコードとして設定した。また、コード化に際し、Chappelet and Lee (2016) の基盤的研究である、ホール (1996) において示された、報告書や計画書の作成はテクニカルファイルとして、会場周辺の環境への考慮にあたる基盤整備はプロモーションとして位置付けた。次に、インタビュー調査によって得られた口述データを各コードに分類し、各プロセスの実態を分析した。具体的に、テクニカルファイルとしては、開催地が有する資源に関連したデータが該当する。例えば、姫路市が保有する会場および施設に関する情報や観光地等に関連したデータである。ロビイングとしては、関係者との関係構築にあたるデータが該当する。例えば、姫路市とイベント主催者との接点や関係構築方法である。プロモーションとしては、イベント主催者への訴求や世論からの支持獲得に向けた基盤整備に関するデータが該当する。例えば、行政担当者と会場周辺地域との関係構築により、イベント

招致への好印象を形成することが挙げられる。コーディング後には、分析結果と調査対象者の意図との間に齟齬が生じていないかメールにて確認を行った。この過程では、とりわけ、ロビイングに関する表現の修正依頼が多かった。【検討課題Ⅱ】では、テクニカルファイル、ロビイング、プロモーションの各プロセスについてイベント種類別に比較検討を実施した後、スポーツイベントの特徴を把握した。なお、この調査において、対象者に対する研究の主旨説明や録音に関する承諾は実施済みである。

3. 結果・考察

3.1 検討課題Ⅰ：イベント招致戦略に関するフレームワークの検証

表2は、Chappelet and Lee (2016) のフレームワークに基づき、地域イベントの招致戦略の実態を整理した口述データである。第一に、「テクニカルファイル」に関しては、例えばIMPERIAL LIVE TOUR 2025の場合、コンベンションセンターである当該施設にコンサートを招致する際には、施設のアクセスと開催都市の情勢等をイベントプロモーターに対して具体的に提示していた。そのため、コンサートの招致方法はアーティストを問わず、全て同様であった。安全工学グローバルサミットおよび研究発表会では、施設のアクセスだけでなく、世界遺産である姫路城を代表とした観光地へのアクセスも含めた姫路市の魅力をコンパクトシティという表現を用いて訴えることによって、当該イベント関係者の利益となる興行面や負担の軽減に関しても提示していた。また、姫路市では、イベント招致を目指す際に、テクニカルファイルの提示の一環として、観光コンベンションビューローによって作成された施設、観光地、宿泊施設等の姫路市に関する情報を掲載したガイドブックを配布していた。以上のように、当該イベントにおける利益を、開催候補地だけでなく、イベント主催者も求めているため、イベント招致活動において、都市の魅力を提示し他都市との差別化に繋げることが可能な詳細計画であるテクニカルファイルの提示が重要と示唆された。

第二に、「ロビイング」に関しては、例えば安全工学グローバルサミットおよび研究発表会の場合、意見交換の場を通して、開催候補地関係者とイベント運営者がイベント主催者に対して開催候補地の魅力を訴えていた。姫路城世界遺産登録30周年記念城うた祭では、開催候補地にゆかりあるイベント関係者との関係性を活用し、イベント招致を実現させていた。ゆえに、このプロセスでは、積極的なコミュニケーションによって、関係者同士の関係構築だけでなく、イベント主催者に対して直接的に開催候補地の魅力を訴えられるため、他のプロセスにも繋がる有効な手段と

表2 演繹的コーディングの概要

ラベル	内容	発言例
テクニカルファイル	イベント主催者に魅力的に開催期間や滞在先、会場等の詳細計画を提示すること。	「（アクリエひめじは）姫路駅から徒歩10分で来れるところにある。そして、高速道からも割と近いです。5%くらいが県外ナンバーの車にご利用いただいています。利便性が高い。さらに播磨という経済圏は150万規模の人口圏ですので、十分興行的にペイしますよと言うのは訴えております。」（アクリエひめじ・D氏）
ロビイング	賄賂や汚職を伴わない、イベント主催者に対して開催候補地関係者が道徳的態度や感情に訴える説得行為。	「当初は『姫路ってどこ?』『何が美味しいの?』といった声が多く聞かれました。しかし、下見や打ち合わせで実際に姫路を訪れ、交流の場を重ねるうちに、姫路出身のコンベンション大会長や関係者との親交が深まりました。地元ならではの魅力を体感する時間を共有することで、主催者をはじめ関係者の方々は次第に姫路の魅力に惹かれ、すっかりファンになってくださったのです。最後には『また来たい』という言葉をいただき、このコンベンションを通じて姫路のファンが確実に増えたことを実感しました。このように、開催候補地の関係者とコンベンション開催関係者との積極的なコミュニケーションを通じて姫路の魅力を直接体験し、その価値を伝えられたことが、コンベンション招致成功の大きな要因となったといえるでしょう。」（観光コンベンションビューロー・C氏）
プロモーション	イベント招致に向けた環境整備として、周辺地域等からの理解を求めること。	「（施設周辺地域に対して）ご迷惑、（イベント開催日）この日だけお掛けしますっていう話をして、（...）」（姫路市役所・A氏）

示唆された。

第三に、「プロモーション」に関しては、イベント毎に開催した、世論を活用したイベント主催者への訴求にあたる口述データは見受けられなかった。しかし、イベント毎の実施ではなく、基盤整備に該当する環境考慮に関する口述データは取得できた。具体的には、スポーツイベントに関連したデータが挙げられ、他のイベントにおいては当該プロセスに該当する取り組みが実施されていないとの口述があった。姫路球場の建設時には、騒音や交通渋滞等の負の影響を受けやすい周辺地域からの支持獲得に向けて自治会と協力し、環境整備に取り組んでいた。また、調査対象としたイベントと異なるが、姫路市に拠点を置くプロスポーツクラブに関しては、定期的に慈善活動を実施している。このような取り組みは、地域住民に対してイベント招致へ好印象を抱かせることを可能となる。すなわち、地域イベントでは、イベント規模が小さいため、外部に対する訴求よりも、内部に対してイベント招致活動への好印象を抱かせることが重要と把握できる。ゆえに、基盤整備として会場周辺地域に対して綿密な事前準備を行うことによ

り、イベントに対して負の印象を低減することが可能となり、招致に対する協力も得やすくなるといえる。

以上より、本研究において、Chappelet and Lee (2016)の3つのプロセスは確認できたが、プロモーションのうち、イベント主催者への訴求に関するデータは確認できなかった。したがって、国内地域イベント招致戦略におけるプロモーションとしては、イベント主催者への訴求といった外向きのプロセスではなく、基盤整備という内向きのプロセスが重要と示唆された。

3.2 検討課題Ⅱ：スポーツイベントに関する招致戦略の特徴

検討課題Ⅰの結果および表3に示す通り、地域イベントにおいてもChappelet and Lee (2016)による3つのプロセスは確認できたが、プロモーションの採用に関しては、スポーツイベントにのみ確認された。そこで、以下では、とりわけ、スポーツイベントに該当するプロ野球フレッシュオールスターゲーム2024に着目し、イベント種類別の招致方法の比較および検討を行う。

プロモーションに関しては、Chappelet and Lee（2016）のフレームワークでは、メディアを活用した広報活動の重要性が示されていた。一方で、本研究で対象とした地域イベントでは、地域密着型の小規模イベントという特性から、外部への誘因が小さいため、世論を活用したイベント主催者への訴求ではなく、内的なプロモーションである基盤整備に比重が置かれていた。実際、プロ野球フレッシュオールスターゲーム 2024の場合、屋外球場のウイנק球場にて開催されたため、交通渋滞だけでなく、騒音も含めた公害による負の影響が懸念される。また、当該施設では、プロ野球だけでなく、吹奏楽による応援を用いた高校野球も実施される。ゆえに、施設建設時より周辺地域から好印象を抱いてもらうための直接的なコミュニケーションによる活動を通して、負の側面を理解してもらい、その対策を講じることによってイベント招致に対して好印象の獲

得を目指していた。したがって、ロビイングとは関係構築の対象が異なるが、プロモーションのうち、とりわけ基盤整備の過程においては、周辺地域との関係性の構築が重要であることが示唆された。

以上、本研究の事例では、小規模スポーツイベントにおける開催候補地は、イベント運営者、イベント主催者、住民の各方面に対する関係構築が重要と把握できる。また、地域イベントでは、外部への誘因が低く、地域との相互作用が成功に関与するため、プロモーションに関しては、イベント主催者への訴求ではなく、会場周辺地域への直接的なコミュニケーションを活用した基盤整備が有効と示唆された。すなわち、本研究では、プロモーションにおいても、とりわけ基盤整備に関する重要性が把握できた。ただし、スポーツイベントに該当する事例は当該イベントに限定的であり、サンプル数が少ないため、一般化は困難とい

表3 イベント種類別の各プロセスの実施状況

調査対象者	テクニカルファイル	ロビイング	プロモーション
姫路市 スポーツ振興室 A氏	・姫路市のアクセス ・会場の設備 ・姫路市の情勢 ・姫路市の観光地 ・宿泊施設 等 以上の情報および計画に関する詳細を姫路観光コンベンションビューローが作成したガイドブックと共に提示し、姫路市での開催メリットを訴求していた。	姫路市と阪神タイガースおよびオリックス・バファローズとの関係性を活用し、各球団に仲介してもらい、イベント主催者との関係性を構築した。	施設建設時より周辺地域に対して負の側面を説明し、理解を得ることで、イベント招致に対して好印象を形成していた。（基盤整備）
姫路市 観光コンベンション室 B氏		主催者は姫路城の魅力から姫路市に関心を寄せていたため、姫路市の魅力を訴求により、関係性を構築した。また、運営者が姫路市にゆかりのある人物であったため、仲介により、関係性を深めていった。	未実施
姫路観光 コンベンションビューロー C氏		C氏を含む担当者は、イベント事務局を複数回訪ね、姫路市の魅力を訴えることで関心を寄せた。その後、主催者が姫路市を訪問した際には、イベント運営者を介在させた意見交換の場を活用し、関係性を深めた。	
アクリエひめじ D氏		実際にコンサートを実施したアーティストの感想や興行面を踏まえ、プロモーターとの関係性が構築され、様々なコンサートの招致が実現される。	

える。

以上より、本研究の結果として、地域イベントでは、開催都市が主体となった大規模なイベント招致活動は見受けられず、個人間の関係構築や地域住民からの好印象を形成するための招致活動に比重が置かれているといえる。そのため、地域イベントにおけるプロモーションでは、イベント主催者への訴求である外向きのプロセスよりも、イベントによる負の影響の低減に繋がる、周辺地域への環境考慮である基盤整備としての内向きのプロセスが重要と示唆された。また基盤整備に関しては、イベント毎の単発的な実施ではなく、長期的な関係構築に努めることで、イベントによる負の影響の緩和や住民からの理解獲得により、イベント招致への支持獲得が可能と考えられる。しかし、先行研究では、プロモーションにおけるイベント主催者への訴求に関して、イベント招致への積極性を示し、イベントの地域的利益を強調することを可能にすると示されている（Chappelet and Lee, 2016）。ゆえに、全プロセスの網羅的な採用ではなく、イベント規模および種類に応じて各プロセスの比重や具体的な取り組み方法を調整し、戦略を講じることが重要であると把握できた。その結果、開催候補地だけでなく、イベント主催者もイベント開催前後を含めた効果を期待することが可能と考えられる。特に、イベントによる効果を提示することによって、余暇活動としてイベントを活用するように世論を動かすことも可能となり、より一層のレジャー・余暇活動の発展に寄与すると考える。さらに、多くの先行研究が世界規模の大規模イベントを対象としているにもかかわらず、本研究では、地域活性化に直結した小規模イベントを対象とし、イベント種類別に調査を実施している点に新規性があるといえる。

また、Chappelet and Lee（2016）を筆頭とした先行研究では、3つのプロセスのうち、ロビイングを最重要視している。実際、本研究におけるロビイングに関しても、他のプロセスに影響を与えることや、即効性を求めない、長期的な関係構築が有効であることから、イベント毎の工夫が見受けられたため、当該先行研究においても比重が置かれているプロセスであると把握できた。ただし、ロビイングは、汚職を伴わない説得行為と定義されているが、国内では、国外と比べて法整備等が不足しており、十分な理論形成に至っていない状況にあるため、この課題解決に向けて研究を進めることが求められる。

4. まとめにかえて

本研究では、Chappelet and Lee（2016）が提示したイベント招致戦略の3つのプロセスである、①テクニカルファイル、②ロビイング、③プロモーションを用いて、国

内の地域イベントにおける招致戦略の実態を明らかにした後、イベント種類別の招致方法に関する比較を実施した。その結果、国内の地域イベント招致活動においてもChappelet and Lee（2016）の3つのプロセスは有効であるが、プロモーションに関しては、基盤整備としての住民との関係構築に限定的であった。ゆえに、イベント規模および種類に応じて、各プロセスの比重や具体的な取り組み方法を調整することが重要と示唆された。したがって、本研究は、地域活性化に向けたイベント実務を検討する際の基盤を提供していることが考えられる。

まとめにかえて、以下では本研究の限界および今後の課題について述べる。研究の限界として、第一に、姫路市では各イベントにおけるデータ分析を実施していないため、イベント開催前後の効果を含み、イベント招致に関するパフォーマンス指標を活用した比較ができなかった。第二に、研究対象が少なく、とりわけ、スポーツイベントに関しては一つの事例に限定的であったため、イベント種類別の各プロセスの実態比較が不十分であり、本研究の一般化可能性については多大な限界を有していることが考えられる。第三に、本研究対象であるスポーツイベントは一つの事例に限定的であり、国内スポーツイベントの招致活動の特徴に関する十分な反映には、課題があることが考えられる。

以上より、今後の課題として、経済波及効果を含めた招致段階から開催後に至るまでのイベント効果を計測し、各プロセスに関する重要性を精査するような研究課題が求められる。

謝辞

本研究の実施にあたり、インタビュー調査にご協力いただいた姫路市の関係者の皆様に深く感謝申し上げます。また、本研究の遂行にあたり、多大なるご指導と貴重なご助言を賜りました武庫川女子大学健康・スポーツ科学部宇野博武准教授に謝意を表する。

引用文献

- Chappelet, J. L., and Lee, K. H. (2016) The emerging concept of sport-event-hosting strategy: Definition and comparison. *Journal of Global Sport Management*, 1(1-2), 34-48.
- Getz, D., and Page, S. J. (2016) Progress and prospects for event tourism research. *Tourism Management*, 52, 593-631.
- Strittmatter, A.-M., Løvold Syversen, T., and Nordhagen,

- S. E. (2023) Sport event policy. In V. Girginov and M. Parent (eds.) . The Routledge Encyclopedia of Sport Studies. Routledge.
- Tumati, R., Daskin, M., Al-Raqadi, Z., and Yavuz, E. (2025) Omani consumers' motivations and experiences to participate in international sports events: Some managerial implications for sport event development. Journal of Sports Research and Innovation, 2, 1-16.
- 久保田潤, 和久貴洋 (2025) 世界選手権大会開催国分析を通じた国際競技大会招致・開催推進方策に関する検討. 体育学研究, 70, 175-194.
- スポーツ庁 (2022) スポーツ国際展開基盤形成事業. 文部科学省. https://www.mext.go.jp/sports/content/000021330_20220317_3.pdf, (参照日2026年6月25日) .
- スポーツ庁 (2023) スポーツ国際展開基盤形成事業（国際競技大会の在り方に関する調査研究）事業報告書. 文部科学省. https://www.mext.go.jp/sports/content/20230901-spt_skokusai-000031609_2.pdf, (参照日2026年6月25日) .
- スポーツ庁 (2024) スタジアム・アリーナ改革ガイドブック第3版 国内外の事例集. 文部科学省. https://www.mext.go.jp/sports/content/20240502-spt_sposeisy-300000725_03.pdf, (参照日2026年6月25日) .
- 田村正紀 (2006) リサーチ・デザイン：経営知識創造の基本技術. 白桃書房.
- 内閣官房 (2014) まち・ひと・しごと創生について. 首相官邸. https://www.kantei.go.jp/jp/headline/chihou_sousei/pdf/siryou1.pdf, (参照日2026年6月25日) .
- コリン・マイケル・ホール (1996) イベント観光学：イベントの効果, 運営と企画 (須田直之訳). 信山社.
- 松瀬学 (2020) 東京五輪・パラリンピックの招致活動検証. オリンピックスポーツ文化研究, 5, 85-104.

(2026年2月26日受付)
(2026年7月17日受理)